

## 地域に根差し、主体的に学ぶ 伊佐っ子の育成

～書いて、話して、伝え合う授業づくり～

養父市立伊佐小学校 校長 米田 規子  
主幹教諭 片芝 教子

### 1. はじめに

本校は、但馬地方南部に位置し、周りを山々に囲まれた自然豊かな地域にある全校生 99 人の小規模校である。学校の近くにはコウノトリの放鳥拠点があり、児童はコウノトリの観察を続けながら、コウノトリを育む環境学習にも取り組んでいる。

NIE 実践指定としては1年目となる。

### 2. 学校としての取り組み

＜学校全体での推進目標＞

- ①新聞に慣れ親しむ
- ②社会とのつながりを深める
- ③情報を整理し読み取る力をつけ、言語力や表現力を伸ばす

＜子どもたちのそばに新聞を…＞

年度当初は、各新聞を全校生が通る玄関横のスペースに配置していたが、さらに子どもたちの身近に、そして、ゆっくり新聞を広げられるように、学年教室横（ワークスペース）へ設置場所を移し、より自由な閲覧ができるようにした。また、図書委員会が中心となり、「今日の注目記事」を取り上げて掲示をしたり、給食時の放送で紹介したりした。そのことにより、子どもたちはわずかな時間でも新聞を手に取り、紹介された記事を探す姿も見られるようになった。



＜夏休み・新聞作り＞

夏休みの共通の課題として全校生で「新聞作り」に取り組んだ。9月には出来上がった全校生の新聞を多目的ホールに掲示して、交流を図った。

保護者の協力を得ながら仕上げた1年生の新聞。自分の考えを入れた上で構成を練った6年生の新聞など、それぞれ学年らしい味わいのある「夏休み新聞」が仕上がった。

また、掲示した夏休み新聞をお互いに読み合っ、感想や良いところなどのコメントを付箋に書いて交流し合ったことも、より良い新聞作りへの意欲につながった。



＜各学年からの活動紹介＞

各学年での新聞活用の様子を児童朝会で発表し、交流をした。学年報告をするにあたって、それぞれの学年で活動を振り返ってまとめたり、また、他の学年の様子を知ったりできる良い機会にもなった。



### 3. 各学年の実践

#### (1) 1年生

朝の会や授業の中で子どもたちが興味のある記事や写真を教師が紹介した。特に国語科「うみのかくれんぼ」(光村1年)では、学習に活用できる記事がたくさんあり、子どもたちもより新聞に親しむことができた。

学習の状況や子どもの様子を見ながら教師が記事をかみくだきながら紹介することで子どもたちは新聞に興味を持つようになり、文字を1字ずつ追って一生懸命に読もうとする姿が見られた。子ども同士でも新聞について話す機会も増え、「子ども新聞」の購入を始めた家庭もあった。

#### (2) 2年生

2年生は月に1回発行される新聞2分の「神戸新聞・写真ニュース」の壁新聞を使って活動を続けた。1枚ものであるため一度に多くの児童が読んだり見たりできる上に、写真も大きく文章の量としても2年生に適切であった。

主に生活科の時間を使い、子どもたちが新聞の中から気になる写真を見つけ、その写真についての記事を教師が紹介し、新聞を読み深めた。教師が解説を加えることで、子どもたちにも理解しやすく、次の新聞を楽しみに待つようになった。

#### (3) 3年生

##### ①新聞作り

社会見学で取材した結果を「新聞」としてまとめた。自分たちで調べてきた事柄を新聞という形でまとめることができ、充実感が味わえたようだ。



##### ②国語科での新聞記事活用

「言いたいことを伝えよう」(光村3年)の発展として新聞記事から自分の伝えたいことを見つけて、さらに調べ、学級で発表した。

##### ③「しつもん! ドラえもん」の活用

朝日新聞で掲載されている「しつもん! ドラえもん」を切り抜き、クイズ大会をした。楽しみながらできるため、子どもたちはより新聞を開き、他の記事へ興味が湧くようになった。



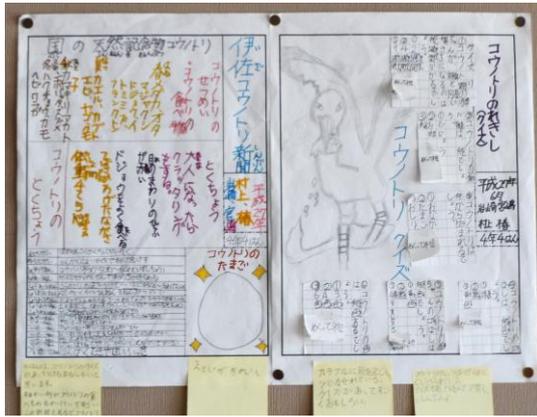
#### (4) 4年生

##### ①年間を通した新聞作り

4年生では、国語科と総合的な学習の時間、そしてNIE活動を貫く軸として、年間を通した新聞作りを計画、実践した。

初めは、自分のことだけを日記風にまとめる新聞が多かったが、見出しの付け方や記事の書き方、読者が読みやすい記事の構成を学び、そして、日々、配達される新聞を目にしていく中で、徐々に相手を意識した記事を書けるようになり、写真(絵)や構成の工夫も見られる新聞が出来上がるようになっていった。

年間を通して行った新聞作りは、「相手をひきつける見出しを付ける」「限られた字数の中で伝えたいことをまとめる」「その記事にふさわしい写真やイラストを付ける」など、さまざまな力を必要とするもので、言語力を高め、自己の学びを深めることにも有効であったと思う。



## ②新聞スクラップ

数日分の新聞の中から自分たちが決めたテーマに沿った記事や新聞を探し、スクラップしていく。その過程で、自分のテーマについての知識が深まると同時に、自然と「スポーツはこの辺りに載っているぞ」「見出しの言葉が違うぞ!」といった新聞の構成や各社の記事の違いなどに気付いていったようだ。



## (5) 5年生

### ①国語科での活用

5年生では、新聞について学ぶ「新聞を読もう」(光村5年)という単元の中で、まず新聞一面の構成を知り、それぞれの面にどのような分野の記事が掲載されているのか、新聞全体を見渡した構成を学んだ。

数社の新聞があるため、同じ記事でも扱い方や記事の書きぶりが違い、そして、それが相手(読者)に与える印象も違うことにまで学習を深められた。

学習後は、より新聞に興味を持ち、子どもたちが新聞を読む姿を多く見るようになった。その中で、自分たちで記事を比較して読む様子も見られた。

### ②新聞記者の声を聞く

NIE活動の一環として新聞記者派遣がある。今回は、神戸新聞社但馬総局養父支局・那谷享平支局長から、新聞記事の書き方や記者としての心掛けなど、生の声をお聞きできた。子どもたちにとっては、やはり現場で働いておられる方の声が聞けるのは興味深く、さらに新聞に興味を持つことができた。

## (6) 6年生

### ①記事と学習を結びつける

6年生での社会科や総合的な学習の時間は、自分たちが住む地域から目を広げ、世界とのつながりを考えていくものが多い。特に平和学習や環境学習では、新聞がとても有効であり、その都度、活用できた。ただ、子どもたちは新聞に掲載されている事柄を単純に鵜のみしてしまう傾向にあるため、教師自身がより広い視野に立って指導していく必要がある。



### ②「正平調」の書き写し

神戸新聞に毎日掲載されている正平調は、限られた文字数の中で内容を伝え、考えを述べていく優れた文章である。6年生にとって一読しただけでは理解が難しい文章もあるが、毎日、記事の書

き写しにより、文章の書きぶりに触れることができた。始めた頃は、書き写すだけでもなかなか難しく、10～15分間をかけても1日分が終わらなかったが、1年間活動を続けると、クラスの全員が時間内に写し終えるようになった。書くことへの抵抗も減り、優れた文章に触れられるのはとても意義深いものであった。



### ③記者派遣

5年生と共に記者派遣を受けた。高学年へは、文章を書くことについて教えてくださった四つのポイントは、卒業文集に載せる文章を書く際に役立った。また、記事を「書く」ことに責任を持って取り組まれている仕事ぶりを聞き、「社会で働く」意識も深まった。



### ④1～5年生への記事紹介

新聞記事に慣れ親しむことを目的に、6年生が選んだ新聞記事を1～5年生へ紹介に行った。学年に応じて興味がありそうな内容を選び、その学年の子どもたちが分かるように紹介するには、記事を深く読み込む必要があり、6年生自身に読む力・説明する力を付ける良い機会となった。



## 4. おわりに

NIEの実践をして1年目。講師を招いてお話を聞いたり、先進校の実践を参考にさせていただいたりしながら、本校の実践を重ねていった。家庭でも新聞を読まない保護者が増えていく中、初めは遠い存在であった新聞が、子どもたちの近い存在になりつつあると感じた1年であった。

新聞記事は子どもたちにとって難しいのでは…という大人の固定概念を覆すように、子どもたちは自分たちの興味のある写真や記事から新聞に入っていく、子どもたち同士で新聞について話す姿も見られる。スポーツや地元の記事、そして自分たちが学習を続けているコウノトリについては特に興味・関心が強く、地域のことへ目を向けるきっかけともなった。

今後は、教師自身がより考えの幅、活動の幅を広げ、活用できる方法を研究していきたい。学校は、ともすれば閉鎖的になりがちである。新聞を読めば、社会とつながることができる。新聞を作って発信すれば、地域ともつながる。次年度はさらに子どもたちを社会とつなげていきたい。



<講師を招聘してNIE研修の様子>